

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：33501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520073

研究課題名(和文) 南島におけるキリスト教ネットワークの形成とその展開に関する交流史的研究

研究課題名(英文) Interchange Historic Study on Formation and Border Violation of the Christian Network in Ryukyu Islands(Nanto)

研究代表者

一色 哲 (ISSHIKI, Aki)

帝京科学大学・医療科学部・教授

研究者番号：70299056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：「南島」には、キリスト教徒が多く、独特の信仰がある。本研究では、その原因が、戦後、沖縄各群島の米軍占領にあることを解明した。また、19世紀末に開始した南島キリスト教伝道は、旧植民地や帝国日本の周辺地域との信仰上のネットワーク形成や、越境と交流の繰り返して「周縁的伝道知」が蓄積し、「民衆キリスト教の弧」が形成されたことを立証した。あわせて、この信仰のあり方が戦後も継承されていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： There are many Christians in the "South Islands(南島)" and have unique faith. In this study, I have clarified that the cause is in the occupation of the US military in each group of Okinawa after the war. The South Islands Christianity evangelism started seriously at the end of the 19th century. And that evangelism formed a network of faith with the former colonies and the surrounding areas and states of the empire Japan. Also, believers and evangelists crossed over those areas and repeated various exchanges. And they got "knowledge of circumcision evangelism" different from the mainland, they returned to the South Islands and spread them. Thus, I prove that the "arc of popular Christianity" was formed in the area around the South Islands. In addition, I revealed that the characteristics of that faith are inherited even after the war.

研究分野：南島・日本キリスト教史 文化交流史

キーワード：キリスト教交流史 「民衆キリスト教」の弧 南島キリスト教史 志喜屋孝信 新沖縄建設運動 越境と交流 周縁的伝道知 軍事化

1. 研究開始当初の背景

報告者は、これまで3度関連の研究分野で科学研究費助成金を受けている本研究は、これらの研究から対象年代や対象地域を広げ、研究をさらに深化・発展させたものである。

このように対象と時代を広げ、新しい課題を設定したのは、以下の理由による。

第一に、戦後沖縄研究を続ける過程で、従来は、沖縄戦で一端断絶したと思われていた南島地域のキリスト教伝道のなかに、戦前から引き継がれているものをいくつか発見したからである。

第二に、戦前の沖縄キリスト教史を概観する過程で、奄美群島の島々との人的つながり(ネットワーク)を示唆するできごとが、いくつか確認できた。これにより、沖縄県と鹿児島県と行政的に分断されていた南島は、キリスト教伝道に限っては、一体の伝道圏を形成したのではないかという仮説を立てることが可能であると考えた。

第三に、これまでも、石垣島での教会形成に台湾からの引揚者が関わっていたり、戦後の教会形成に朝鮮半島・旧満州地域からの引揚者の関与があったりしたことがわかっていった。したがって、それらの「帝国日本」の外縁部と南島伝道の関わりについて、信徒や伝道者の動態とネットワーク形成の観点から調査する必要を感じたからである。

2. 研究の目的

(1) 南島キリスト教の伝道圏の構造化

戦前期における南島のキリスト教伝道は、県の枠を超えてひとつの伝道圏として完結していたと思われる。この仮説を実証するために、各教派や外国人宣教師の動向(ネットワーク)を総合的に調査・検討することを目的とした。あわせて、信徒・伝道者の越境についての動態を把握することで、南島を巡る伝道と伝道圏の形成についての概略を図式化することを目的とした。

(2) 帝国日本周縁地域との交流

これまで、個別に語られたり、記述されたりしてきたことを統合的・総合的に考察することで、南島をめぐるキリスト教関係者(信徒・伝道者・外国人宣教師等々)の動態を明らかにし、それぞれの間にどのような刺激や感化が行われ、どのような信仰が形成されてきたかを、「周縁的伝道知」ということばを手がかりに、解明することを目的とした。

(3) 「民衆キリスト教の弧」

このように独自の伝道圏が形成されてきたことが予測される南島で、その信仰形態について検討・探究することでその共通性を析出したいと考えた。そして、その共通する信仰的傾向を「民衆キリスト教」(池上良正や藤野陽平等)として、その連なりが、南西諸島の島々を貫流し、台湾にまで至る「民衆キリスト教の弧」のネットワークが形成されていた

ことを、立証しようとした。

(4) 南島のキリスト者ネットワーク

南島のキリスト者ネットワークについて、以下の点で分析を行った。

南島群島間のネットワーク

本土から台湾を貫流するネットワーク

移民による米国ハワイ・東海岸、南洋群島とのネットワーク

朝鮮半島・中国東北部・内モンゴルとのネットワーク

在日沖縄人や在米沖縄人をめぐるネットワーク

その分析により、それらのネットワークを通して実行された越境や交流の試みを明らかにすることにより、南島のキリスト教が何度も活性化し、東アジア的環太平洋的視座で本土とはちがった信仰を形成していったことを立証しようとした。

(5) 戦後南島キリスト教史との関連

まず、これまで研究者の関心の薄かった奄美群島の戦後キリスト教史の研究に着手した。また、戦前の南島キリスト教史を俯瞰したあとで、戦後南島キリスト教史、特に、米国占領下における沖縄キリスト教史の再検討をした。そして、沖縄の本土復帰と、南島キリスト教の本土教団復帰における諸問題についても、内外のネットワーク形成と交流史的観点から分析を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) キリスト教交流史

本研究では、以下に概要を述べるとおり、「キリスト教交流史」という方法論を採った。それは、

「越境」：国家・地域の枠組みの越境、労働力移動と伝道圏の拡大・展開について歴史的に把握すること。

「地域」：地域における教派横断的な歴史叙述、地域形成における非キリスト教団体・個人との協働を裏付けていくこと。

「学際」：周辺諸科学の援用による学的越境を積極的に垣見ることである。

その際、東アジア地域、具体的には、日本本土、朝鮮半島、中国本土、台湾の各地のキリスト教史の成果から十分に学びつつ、南島キリスト教史との比較することで、南島キリスト教史を日本本土のそれから切り離して思考することを心がけた。

また、県境や国境にとらわれず、史料収集をし、思考することで、南島キリスト教の特質と普遍性を析出することを試みた。

(2) 文献調査

文献調査については、以下の施設で調査を行った。

公立図書館：沖縄県公文書館、沖縄県立図書館、同八重山分館、石垣市立図書館、宮古島市立平良図書館、同北分

館、鹿児島県立図書館、同奄美図書館、喜界町図書館、国立公文書館、キリスト教関係：日本基督教団沖縄教区資料室、沖縄キリスト教学院大学図書館、名瀬カトリック図書館、日本基督教団名瀬教会、日本ホーリネス教団喜界基督教会、日本基督教団喜界伝道所、日本基督教団徳之島伝道所
個人所蔵資料：日本ホーリネス教団喜界基督教会所蔵の兼山常益関係文書等

(3) 第二次史料の収集と統合

近代以降、戦前期に刊行された書籍や新聞・雑誌史料、戦後に刊行された戦前期の南島キリスト教関係の二次史料をできるだけ収集し、それらの統合を図った。そして、収集した二次文献を群島・島別、教派別、人物別などに分類し、時系列で並べるなど、分析を加えた。

これにより、戦前期の南島キリスト教史を概観するという手法をとった。

(4) 聞き取り調査

報告者は、すでに、沖縄・宮古・八重山の各群島では最低限の聞き取り調査は終えていた。そこで、本研究では、奄美群島、特に、奄美大島ではカトリック教会や日本基督教団、ホーリネス教会、喜界島でも同様の諸教会、徳之島では日本基督教団の教会を中心に聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1) 南島キリスト教伝道圏への伝道戦略

それまで、1600年代と1800年代後半にキリスト教が伝来した南島地域だが、組織的にキリスト教の本格的伝道が開始されたのは、19世紀末のことであった。

このキリスト教の“再々”伝道以後のキリスト教各教派の伝道戦略は、以下の通りである。

カトリック

奄美大島の各界指導者の招聘により鹿児島や長崎の教会から伝道者や宣教師が1891年に来島。奄美群島内の他の島々にも伝道を試みるが、成功せず。また、戦前、沖縄群島以西には広がらず。

メソヂスト

カトリックと同様、1891年に那覇で伝道を開始したメソヂスト教会は、当初、「九州南部」で活動していたが、「沖縄部」を分離し、「南島宣教部」を新たに創設した。そして、奄美群島徳之島の教会は、同宣教部の管轄とした。また、米国人宣教師を派遣して、南島全体で「完結型」の伝道を展開した。

旧日基

メソヂストから少し遅れ、1912年に沖縄出身者により那覇・首里で伝道を開始した旧日基は、戦前、一貫して鎮西中会の管轄であった。そのため、日本本土、特に九州地区の諸教会と関係が深く、奄美群島喜界島の旧日

基教会は鹿児島教会から支援を受けた。また、八重山群島石垣島に設立された教会は、もともと台湾で信仰を得た人の要請に応じてのことで、同様のことは喜界島でも見られた。つまり、旧日基の伝道は、本土から、南島を通り、台湾に至る「貫流型」の伝道であった。

バプテスト教会

1891年に伝道を開始したバプテスト教会は、農村伝道を積極的に展開した。また、「ファンダメンタル」な信仰傾向が強く、土着的伝道を展開した。その伝道の形態は「土着型」と評価できるだろう。これらの伝道の伝統は現在でも「琉球讃美歌」を創作し、それを積極的に利用する姿勢にも表れている。

組合教会

20世紀の初頭、伊波普猷・普成兄弟を中心に「沖縄独立組合教会」が形成されたが、戦前には、伝道の拠点をつくることができなかった。

ホーリネス教会

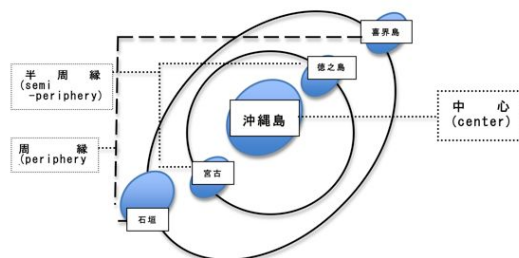
ホーリネス教会は、20世紀に入ってから、奄美群島の大島・喜界島等、沖縄島、そして、石垣島などで独立した伝道を展開した。

(2) 南島キリスト教伝道圏の構造

これらの各教派の伝道戦略と実際の信徒や伝道者の動態の早退を把握し、それを図式化することを試みた。

まず、南島キリスト教伝道圏に構造は、《図》の通りである。

《図一》



土着内在型の地域：奄美大島

奄美大島では、先述の通り、島の有力者が薩摩藩時代以来明治以降も鹿児島県によって行われてきた黒糖の搾取を逃れるために、カトリックを「誘致」したのが伝道のはじまりである。以来、大島北部(北大島)の比較的豊かな農村地帯を中心に、しばしば、集団改宗が行われた。

しかし、1930年代になって、南島全体が軍事化する中で、激しい迫害を経験する。こうして戦争を挟んで伝道者不在の状況が続くが、戦後は、鹿児島だけではなく、日本各地や沖縄の教会へ神父等を多数輩出することになった。

南島キリスト教伝道圏の《中心》：沖縄島

戦前は、南島における本土中央の教派・教団による伝道の窓口になっており、最初に定

住伝道者を本土から受け入れ、宣教師を派遣した教派もあった。また、後述の《半周縁》や《周縁》地域での開拓伝道や伝道者の派遣を行った。

《半周縁》：出郷型の徳之島・宮古島

南島キリスト教伝道圏の《中心》沖縄島の外縁部に位置する徳之島・宮古島の二島は、戦前、南島地域では例外的に教会形成が順調ではなかった。これらの二島は、もともと、沖縄島(本島)や本土への出郷志向が強く、島内外で信仰を得た有望な若者が出郷によって、島内での宣教は低調にならざるを得なかった。

しかし、これらの地域は、戦前・戦後を通して有力な伝道者や神学者の供給地になっていた。徳之島出身の吉満義彦(カトリック神学者)や大保富哉(メソヂスト首里教会初代牧師)、徳義憲(広島女学院院長)等、宮古島出身の平良修(沖縄キリスト教学院学長)や石田順朗(九州ルーテル学院大学学長)、田崎邦男(医療法人社団輔仁会 田崎病院設立者)等がそれにあたる。

《周縁》：遍歴住還型の喜界島・石垣島

南島キリスト教伝道圏の周縁にあたる地域では、隣接する本土や台湾といった他の伝道圏の周縁部分と接しており、それらの地域を中心として、教会形成や伝道活動の活性化をめぐる活発な交流が見られた。

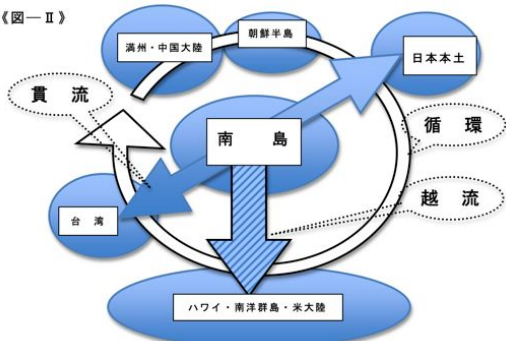
喜界島では、1908年、朝鮮伝道から帰島したホーリネスの伝道者・兼山常益により伝道の端緒が開かれ、同じく島出身で台湾において洗礼を受けた磐井静治の帰京を契機に旧日基の伝道所ができた。また、石垣島では、台湾で信仰を得た信徒の帰島を契機に、那覇から伝道者が派遣されて、教会が形成された。

このような傾向は、戦後も続き、喜界島では戦中・戦後の中断を経て再開された伝道にたずさわったのは、戦中に熱河伝道を経験した福井二郎であった。また、石垣島では、戦中に満洲基督教開拓団を率いていた室野玄一郎が、米軍占領下で伝道をしていた。

(3) 南島キリスト教交流史の動態

こうした信徒や伝道者の動態を追っていくと、南島伝道圏を形成し、そこでの信仰を活性化・深化させていった交流の形態がいくつか見えてくる。それを図式化したのが、《図》である。

《図一》



循環：外地や帝国日本の勢力圏をめぐる

伝道者たち

戦前、南島のキリスト教伝道にたずさわった本土出身伝道者の多くは、朝鮮半島や台湾といった帝国日本の植民地において伝道を経験していた。また、南島出身の伝道者の中にも、こうした植民地や勢力圏(南洋群島や満洲)の伝道経験者が多くいた。これらの伝道者は、メソヂストの巡回伝道牧師のように、南島の周辺部(上記の地域以外に、ハワイや米大陸を含めて)を循環しながら、伝道活動を行っていた。そして、その伝道者たちが得た「周縁的伝道知」(後述)を南島伝道に生かすことで、南島伝道圏における信仰の独自性と東アジアキリスト教徒の共通性が構築されていた。

貫流：《日本本土 南島 台湾》を貫流し、往復する信徒・伝道者たち

旧日基の指導者である植村正久は、沖縄(伝道)に強い関心を持ち続けていた。彼は、なくなる直前に沖縄を訪問し、那覇の旧日基教会に経済的支援を約束した。また、旧日基は、先述の通り、南島を鎮西中会の管轄としたので、旧日基の「植村人脈」ともいべきネットワークが本土・九州から南島を経て、台湾に至る地域で形成された。それから、植村正久が最期まで牧師を務めた富士見町教会には、戦後沖縄教会の指導者となった仲里朝章や比嘉盛仁など、多数の南島出身者が信徒となり、求道者となっていた。このような「貫流」する信徒・伝道者のネットワークは、旧日基だけではなく、ホーリネス系の教会にも見られた。

越流：出稼ぎ移民とキリスト教ネットワーク

沖縄では1900年に集団移民がはじまり、ハワイや米大陸西海岸、南米、南洋群島などで次第に沖縄人コミュニティがつけられていった。こうして、南島、特に沖縄から越流していった者になかには、すでに沖縄でキリスト教の洗礼を受けた者もいた。

このうち、屋部憲伝や宮城与徳たちは、ハワイを経て、1912年、ロサンゼルスの本拠に北米沖縄県人会を設立した。そして、しだいにキリスト教を離れて社会主義思想に接近し、社会問題研究会を組織する。

また、もともとバプテストの伝道者で、のちに伊波普猷たちの組合教会に移った比嘉静観は、のちにハワイにわたった。そして、独立黎明教会を創設し、伝道の傍らで、沖縄人や日本人の移民を対象に労働者の支援を積極的に行った。

このような労働力移動にともない、「外地」で信仰を得たひとたちが越流地域から南島に帰還することで、南島地域には新しい信仰のありかたがもたらされ、信仰の復興が行われた。

(4) 「周縁的伝道知」と「民衆キリスト教の弧」

このような移民や植民の行き先、特に、台

湾や南洋群島では、沖縄人たちは、日本人たちから差別的な待遇を受けていた。そして、沖縄人移民たちは、日本人と現地人の中間的な地位を与えられて、現地人と直接接する職業に就く者も多くいた。これらはすべて、現地人の反感や反発が直接日本人に向かうことがないように、沖縄人たちが、その緩衝材になっていたことという他にない。

そもそも、日本のキリスト教は欧米の近代文明を受け入れ、日本の近代化に貢献してきたと評価されてきた。しかし、南島地域は、日本近代化から得るものが少なく、むしろ、その闇を担った地域で会ったという点で、帝国日本の周縁部、つまり、旧植民地や勢力圏(満洲・南洋群島)と共通する点が多く見られる。このことは、キリスト教信仰にも同様である。

つまり、南島出身で台湾や朝鮮半島に仕事を求めた者たちは、ほとんどが、現地人の生活や日本人から受けた待遇を密接に感じていた。そして、そこで信仰を得たキリスト者は、その所属教会が現地の日本人教会であるとしても、植民地支配に呻吟する現地住民と極めて近い生活体験を有することになる。

その点で、南島出身で旧植民地や伝道圏で信仰を得た人びとは、それぞれの活動の場で、「周縁的伝道知」ともいえる体験知を身につけることになる。

南島には、本土とは違った独特の信仰が、近代以降、育っていった。その要因の一つが、南島出身の信徒・伝道者による植民地での経験の蓄積と「周縁的伝道知」の獲得であった。このことは、同時に、南島のキリスト教信仰が、朝鮮半島や台湾等のそれと近い性質を持つことにつながっていた。

日本本土では、近代以降、キリスト教が西洋文明による近代化の中心となってきた。しかし、南島や帝国日本の周縁部は、こうした近代化の光よりも、(内国)植民地化など、近代化の闇に部分に蔽われていた。そこに、個人や民族の救済を強烈に求める信仰が生まれていったのであった。

そして、このような信仰のあり方は、池上良正や藤野陽平等が日本のホーリネスや台湾の真耶蘇教会等で証明した「民衆キリスト教」と同質のものであった。このことから、「周縁的伝道知」によって醸成された救済信仰が本土から南西諸島を経由して、台湾に至る島伝いにつらなっていく「民衆キリスト教の弧」が形成されていたことが、明確になった。

(5) 南島キリスト教の交流史的研究

上記のような成果は、キリスト教史のみならず、宗教社会学や民族学、文化人類学、歴史学、国際関係史などの諸成果に学びながら(「学際」)、ひとつひとつ得てきたものである。

また、南島キリスト教史を日本キリスト教史から切り離して考えることで、周辺地域と

の人的交流の実態が明らかになった。また、最初の伝道(ファースト・インパクト)だけではなく、さまざまな地域から何度も波状的にインパクトを受けることで、南島のキリスト教信仰は重層的になり、その都度活性化していった。これらは、「越境」という視座から信徒・伝道者の動態を見た成果による。

こうして、地域社会のなかで、教派による縦切りのキリスト教史ではなく、「地域」にこだわりながら、全教派の動向と超教派的な傾向をあわせて横断的に南島のキリスト教の歴史をふり返ることで、いままで見過ごされてきた信徒、特に、女性の信徒たちのキリスト教史への関与を凝視することが可能になった。

(6) 戦後キリスト教の諸相

このように、近代以降、戦前期から、戦後の南島のキリスト教史を見渡すことが、本研究で初めて可能になったと考えている。

奄美群島の戦後キリスト教史

奄美群島の本土復帰後、同群島で初めて日本基督教団による伝道が再開された喜界島での教会再建を歴史的に明らかにした。その際、同教団九州教区から派遣された福井二郎牧師が、戦争中に熱河伝道に従事したことに着目し、「周縁的伝道知」の戦後への継承を確認した。

占領下沖縄の平和運動と福音的伝道

日本本土では、通説的にいうと、平和運動など社会的な活動に熱心な信徒・牧師たちは「社会派」と呼ばれ、社会的な関心をもたず、教会の宣教・伝道に力を入れる信徒・牧師たちのことを「福音派」と呼ぶ。しかし、沖縄では、こうした類型化が必ずしもあてはまらない。

沖縄で、1960年代以降、先鋭化する復帰運動と反基地・反米軍運動に参加した信徒・牧師たちは、その信仰は福音主義的で、救済信仰と結びついている。これは、戦前から引き継がれている「周縁的伝道知」に基づく信仰形態が南島に存在していることを確認した。

政治的復帰と本土教団復帰をめぐる本土と南島のズレ

1969年の日本基督教団と沖縄キリスト教団の合同と、それに先立つ、1967年の「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」(「戦責告白」)の形成過程、また、本土教団への復帰後に、教団内で「沖縄」がどう語られ、どう語られなかったかの分析を通じて、それぞれの意識や教会形成のズレを明らかにした。

以上のような、成果をふまえて、「南島キリスト教伝道圏の形成と福音的信仰の浸潤」について、引き続き、交流史的研究を行っていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計26件)

一色哲、「戦責告白」と沖縄 「周縁」の地域からみた日本基督教団の戦後七〇年、キリスト教史学(キリスト教史学会)、査読無、第70集、2015、pp.72-91、DOIなし

一色哲、南島キリスト教史入門 奄美・沖縄・宮古・八重山の近代とキリスト教 第1回～第25回、福音と世界、査読無、2014年11月号～2016年11月号、2014～2016、DOIなし

一色哲、志喜屋孝信のキリスト教 戦後復興と新沖縄建設運動との関連で、紀要(明治学院大学キリスト教研究所)、査読有、47、2014、pp.227-248

<http://hdl.handle.net/10723/2328>

〔学会発表〕(計15件)

一色哲、沖縄から広島へ 牧師・谷本清の軌跡、日本基督教学会第64回学術大会、2016年9月13日、広島女学院大学(広島県広島市)

一色哲、戦争を肯定するキリスト教、反対するキリスト教 米軍占領下沖縄における抑圧と抵抗の構造、キリスト教史学会第67回大会、2016年9月9日、北星学園大学(北海道札幌市)

一色哲、南島におけるキリスト者の越境と伝道圏の形成 東アジアキリスト教交流史をめざして、日本宗教史懇話会・2016年度サマーセミナー、2016年8月30日、サンロード吉備路(岡山県総社市)

一色哲、1930年代以降における南島の軍事化とキリスト教、日本基督教学会第63回学術大会、2015年9月12日、桜美林大学(東京都多摩市)

一色哲、「戦責告白」と沖縄 「周縁」の地域からみた日本基督教団の戦後70年、キリスト教史学会 第66回大会、2015年9月9日、東京女子大学(東京都杉並区)

一色哲、沖縄宣教開始後におけるキリスト教信仰の深化と越境 伊波普猷・伊波月城・比嘉静観らをめぐって、キリスト教史学会 第65回大会、2014年9月19日、同志社大学(京都府京都市)

一色哲、東アジアのキリスト教についての交流史的研究・試論 帝国周縁部における日本教会の伝道圏形成と喜界島を事例に、日本基督教学会第62回学術大会、2014年9月10日、関西学院大学(兵庫県西宮市)

一色哲、帝国日本における移動と越境からみたキリスト教交流史の研究 南島周縁

地域としての喜界島と植民地伝道、キリスト教史学会 第64回大会、2013年9月14日、明治学院大学(東京都港区)

一色哲、志喜屋孝信のキリスト教 戦後復興と新沖縄建設運動との関連で、日本基督教学会 第61回学術大会、2013年9月11日、西南学院大学(福岡県福岡市)

一色哲、奄美群島の教会形成と南島キリスト教交流史研究試論 沖縄伝道との関連で、「宗教と社会」学会 第21回学術大会、2013年6月15日、皇學館大学(三重県伊勢市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

一色 哲 (ISSHIKI, Aki)

帝京科学大学・医療科学部・教授

研究者番号：70299056